



国内総生産(GDP)は、1国内で一定期間に生産された付加価値の合計であり、1国の経済活動のパフォーマンスを測る代表的な尺度です。高度成長期における日本の実質GDPの成長率が10%程度だったと聞けば、当時の日本の経済成長の速さがわかりますし、中央アフリカ共和国の1人当たり実質GDPが日本の60分の1程度だと聞けば、大変貧しい国だということがわかります。このようにGDPはある国の豊かさを

GDPと「豊かさ」の関係

がある点です。たとえば家事や育児などの家庭内で生産されるモノやサービスはGDPにカウントされません。清掃業者にお金を払って掃除してもらったその付加価値はGDPに含まれるのに、自分で掃除を行うとGDPに含まれないことは奇妙に感じます。

第二に、私たちの豊かさは経済活動だけでは決まらない点です。たとえば1人当たりGDPがまったく同じ国でも、所得を一部の富裕層が独占している国と平等に分配されている国では国民が感じる豊かさは異なるでしょう。不平等の程度以外にも、健康、教育、環境など、GDPでは把握できない要素が考慮されています。また近年多くの国で行われている幸福度の計測も、GDPでは把握しきれない国の豊かさを把握しようとする活動だと言ってよいでしょう。

こうした試みの一つに、スタンフォード大学のジョーンズ教授とクレノウ教授が2016年に公開した論文があります。彼らは標準的な経済理論の枠組みを用いて、消費、余暇、平均寿命、不平等などのデータを統合した厚生指標を作成しました。この指標を用いて、GDPで捉えられていない要因を考慮することで世界の見え方が大きく変わるのかどうかが確認してみましよう。

欠点あるも有効な尺度

過去や他の国と比較するとき幅広く利用されています。

しかしGDPには欠点もあります。第一に、GDPでは把握できない経済活動



名古屋市立大学大学院 経済学研究科准教授

木村 匡子

きない国の豊かさに影響を与える要因はいろいろと考えられます。

こうしたGDPの欠点を克服しようと、これまでに多くの試みがなされてきました。代表的なものとして、

国連による「人間開発指数(HDI)」があげられます。HDIは、所得以外にも健康や教育などの要素を統合した指標です。経済協力開発機構による「より良い暮らし指標(BLI)」では、環境やワークライフバランスなど、より幅広い

はアメリカより日本の方が消費の不平等度が低く、寿命が長いからです。

このように、算出された厚生指標と1人当たりGDPにはある程度乖離があるものの、152カ国を対象に計算した両者の相関係数は0.96と非常に1に近い値となっています。GDPは依然として国の豊かさを測るための有効な尺度であると言ってよいでしょう。

きむら・まきこ「マクロ経済学。京都大学博士(経済学)。1979年生まれ。」

